みひたすら念ずる彼等である

（同　第二面）

勇む心こめて　音樂生の吹奏

出陣學徒の力強い壯行の辭が終つたあと式場は〝海ゆかば〟の嚴肅な齊唱につゝまれた、すでに一身を捧げる覺悟の學徒の淸く澄む聲をのせる吹奏、東京音樂學校の出陣學徒らが奏でる力籠めての吹奏である、これを限りに樂器を銃に持ちかへて戰の庭へと思へば出陣への勇む心が熱く籠つて歡ふ人々の耳へ强く響いたのであつた、指揮した本科二年萩谷納君は語る

『はじめの豫定では全部陸軍軍樂隊がやつて下さるのでしたが別れの樂器を奏でて共に征き、共に送りたいといふ氣持ちから是非にとお願ひして肝に銘ずる〝海ゆかば〟を吹奏させて頂きました、この忘られぬ感激を戰場での心として力一杯奮戰する覺悟でをります』

（同　第二面）

（二）陸軍軍楽隊への入隊

繰上げ卒業に次いで学生の徴兵猶予解除、そして昭和十八年秋には学徒出陣という事態を迎え、音楽の専門学校にも戦線の空気が押し寄せていた昭和十九年、東京音楽学校の十四名の生徒が陸軍戸山学校に入学し軍楽隊生徒となった。この年、戸山学校は最後の軍楽隊生徒一二〇名を受け入れたが、そのうち十四名が東京音楽学校の在校生であり、彼らはいわば出陣学徒予備軍であった。

学内にはこの件に関する資料は残されておらず、公文書などによっても確認には至らなかったため、複数の卒業生に対する聞き取り調査、依頼原稿、既存の書物や文章によってまとめた。

東京音楽学校の生徒が軍楽隊に入隊したいきさつを東京音楽学校関係者と戸山学校軍楽隊長双方の側からまとめると、おおよそ以下のようになる。

まず東京音楽学校関係者によれば――

昭和十九年――團伊玖磨、芥川也寸志両者の回想によれば春頃――、校内に陸軍軍楽隊への入隊希望者を募る旨の掲示が学校長名で行われた。これは当時の在校生たちの記憶のほぼ一致するところであるが、残念ながら掲示の一字一句については正確を期するすべをもたない。したがって掲示文の具体的内容については、後掲の齋藤、芥川、團による文章に委ねる。いずれにせよこの掲示により志願し合格した十四名が、十月一日、陸軍戸山学校軍楽隊に入学。音楽学校生としての優遇や免除はいっさいなく、軍楽生徒として八カ月間――本来は二年間であったのが戦時下一年間となり、さらに当時は八カ月に短縮され短期集中教育が行われた――規定どおりの訓練を終えて翌年五月二十八日卒業、陸軍軍楽隊上等兵となった。

次に戸山学校軍楽隊長によれば――

山口常光編著『陸軍軍楽隊史――吹奏楽物語り』には、大正十五年、戸山学校では軍楽隊の弦楽器の強化のため、ヴァイオリンを杉山長谷夫、平井保三両氏に委嘱し、その親切な教授が弦楽の技術向上に大いに役立ったと記されており、戸山学校と東京音楽学校との交流はすでにあったことがわかる。杉山長谷夫は大正四年三月にヴァイオリン専攻で研究科修了、昭和四年以降は管弦楽を教務嘱託され、また管弦楽部員としてヴィオラを弾いている。平井保三は大正九年三月にチェロ専攻で研究科修了、同年教務嘱託となり分教場兼務、昭和三年三月助教授となり管弦楽部ではチェロを弾いた（詳細は本書巻末の職員一覧および年表参照）。

山口常光は明治二十七年長崎県生まれ、陸軍戸山学校卒業後、軍楽隊

に入り、大正七年東京外国語学校フランス語部入学、昭和十七年戸山学校軍楽隊長、十八年陸軍少佐、終戦時戸山学校校長代理、戦後は皇宮奏楽隊長、警視庁音楽隊初代隊長などを歴任したわが国吹奏楽界の草分けの一人。昭和十九年三月十六日より二十一年二月八日まで東京音楽学校教務嘱託。昭和五十二年一月三十日没。

山口の前掲書三八七頁以下、「最後の卒業生」と題するくだりに、ひとつの「裏話」が記されている。原文どおり引用しておく。

戸山学校軍楽隊の最後の生徒となった十九年生一一八名の卒業式が行われたのは五月二十八日、焼け跡の旧幼年学校運動場においてだった。あと三カ月足らずで、日本は悲劇的な敗戦を迎えたわけだが、もちろん、卒業する者も学校関係者も、誰一人としてその敗戦を予想した者はいなかったものの、なにかしらこの卒業式は、敗戦を予感するようなわびしさと白々しさがあった。が、とにかく卒業式当日は空襲もなくてまず終了。教育総監代理から授与された証書を、総代芥川也寸志生徒が緊張して受領したのがいま思い出される。

さいごの戸山学校軍楽隊生徒一一八名。これらまた卒業生のなかには、芥川氏のほか当時東京音楽学校（現東京芸術大学音楽学部）の学生であった者が十三名戸山学校軍楽生徒として卒業した。この十三名は戦後再び音楽学校に再入学した者が多いが、いずれも今日、わが楽壇の現役として華々しい活躍をしている人たちばかりである。

芥川也寸志　昭24東音研究科修（作曲）
伊藤　栄一　昭25東音器楽科卒　東京芸大助教授（指揮、編曲）
石津　憲一　昭22東音研究科修　東京芸大講師（バリトン）
内田富美也
奥村　一　昭22東音本科卒（作曲）
梶原　完　昭19東音ピアノ科卒　ベッツドルフ音校教授（ピアノ）
北爪　規世　昭20東音本科卒　読売日響（ビオラ）
斎藤　高順　昭22東音作曲科卒（ピアノ）作曲家
鈴木　良一（ピアノ）
團　伊玖磨　昭20東音作曲科卒（作曲）
早川　博二　昭20東音器楽科卒（トランペット、作曲）
萩原　哲昌　昭20東音器楽科卒（クラリネット、作曲）
藤嶋（ママ）　義勝

この人々がさいごの戸山学校軍楽隊に入校するについては、いささか私も与って力があった。けっして、いまにしてそのことを恩着せがましく人に誇り、また吹聴すべきことではないのだが、敗戦を前に、ともすれば混乱と精神的虚脱のなかで、正しい判断に迷いがちなころ、私の一方的独断で処理したことが、今日、けっして誤りではなかった、そのささやかな、秘められた裏話しを公表することは、もう許して頂けると考えたからである。

大正十五年に弦楽器の練習のために、東京音楽学校教授というよりチェリストとして有名な平井保三氏や、同じく教授でバイオリニスト、通称楽壇人の間では「殿下」のニックネームのある杉山長谷夫氏（昭27・8死亡、晩年は日本音楽著作権協会専務理事）などを戸山軍楽隊に招へいして講師として、生徒に教えていただいていた

ことは、さきにも述べた通りであるが、終戦時には高折宮次教授らも出講されていた。音楽学校と戸山とは以前から、講師の人事交流や吹奏楽の合同演奏なども行っていたから、平井、杉山氏の講師もその一環であった。

ある日のこと、この平井、杉山両氏が連れだって楽長室の私を訪ね、

「折り入ってお願いがあるのですが……」

と、ひどく緊張した顔をしておられる。

椅子を出してすすめ、話を聴くとつぎのようなことだ。

「いま、日本のすべての大学、高専は学徒動員という名の下に、学業半ばにして学生生徒は戦場に駆り出されている。戦争完遂のためには、これはやむを得ぬことであるが、それぞれ特殊な音楽技術を持っている学生たちが、それを生かし、役立てることなくいたずらに戦地におもむかしめることが、果して国家のためであるかどうか、彼らの技術を一〇〇パーセントに活かして、戦争に協力せしめることこそ大事なことではないだろうか。」

という、まことにもっともな理くつである。そこで、具体的にはどういうことなのか？

「現在音楽学校には数十名の学生が在学しています。しかし、彼らは学業どころじゃありません。遠からず学徒動員で召集されるからです。私たちはできることなら音楽技術を生かして戦争に協力できぬかと考えましたが、それは許されぬことでしょうか。」

私には両氏の申し入れがすぐ分かった。学生のなかにはバイオリンより重いものをもったことのない者だっている、いたずらに鉄砲をもたせて戦地に駆り立てるより、「楽器も兵器」という考えで音楽報国だってできるはずである。

こうして、音楽学校の学生十数名は、戸山学校生徒採用規程どおりの手続きによって、他生徒と全く変りなく軍楽隊生徒として入隊したのである。この人たちも戸山に入れば音楽学校学生でなく、戸山軍楽生徒であるから、特別の差別待遇などはおろか、むしろかえって鍛えられた。

この処置は、当時の隊長である私と、他数名の協議によって進められたのだが、いまでもけっして間違ってはいなかったと考えている。

（山口常光編著『陸軍軍楽隊史――吹奏楽物語り』三八七～三九〇頁）

引用文中、東京音楽学校生徒は十三名となっているが、正しくはもう一名、昭和二十二年甲種師範科卒の沼田元一がおり、卒業生たちの記憶どおり十四名である。沼田は山口の前掲書三九八頁では、終戦時の上等兵のなかに名を連ねている。東京音楽学校からの十四名は全員が八カ月の訓練に耐え抜き上等兵となった。

なお山口氏の文中に挙げられた当時の東京音楽学校生徒十三名中、内田富美也（正しくは富美彌）は昭和二十年九月本科器楽部卒（トランペット）、鈴木良一も昭和二十年卒、藤島義勝は昭和二十二年本科器楽部卒（ピアノ）である。

引用最後部の「私と、他数名の協議」が、実際にどのような形で行われ校内掲示に至ったのか、これ以上は推測の域に属する。翌二十年に終戦を迎えたため東京音楽学校生徒の戸山学校への入学は一度で終わった。

なお乗杉校長と山口軍楽隊長は、ともに昭和六年にベルリンに滞在し

劇場視察で同行している。

山口は楽長補であった昭和五年夏、「ドイツ国を主とし欧洲各国に出張を命ず」という辞令を受けヨーロッパに留学した。八月二十四日に横浜を出帆、約一カ月後にナポリ着、ついでローマ、パリを経て六年四月から十一月までベルリンに滞在、十一月末に帰国した（山口編著　前掲書二一三～二一四頁）。

一方、乗杉嘉壽東京音楽学校長は昭和六年八月から十二月まで欧州音楽教育視察旅行に出かけ、約三カ月半ヨーロッパに滞在した。彼は滞欧中の様子をいく度にもわたり東京音楽学校同窓会の機関誌『同聲會報』に寄稿している。その中に「リンデン街の國立オペラハウスへは同月（十月）二十三日の晝間に佐藤君や當時在獨中の青柳、福井兩君の他に陸軍々樂隊の山口君と一緒に舞臺裝置等を參觀したがこれより前の同十八日夜は獨逸國文部省の招待で同劇場に上演中のウエーベルの「オーベロン」を觀賞した」（『同聲會報』第二〇一号、昭和九年二月、二〇頁）とある。また同誌第一七九号では留学中の卒業生佐藤謙三が乗杉校長の行程を次のように伝えている。「二十三日（金）午前十一時國立オペラ劇場の舞臺裝置參觀、この時は青柳、福井兩君の外陸軍々樂隊長補山口常光君もお伴しました、この夜は日本大使の招待會でした。」（昭和七年一月、一三頁）

以下、かつての軍楽生徒であった齋藤高順、芥川也寸志、團伊玖磨の各氏に当時を語っていただく。参考資料として、戸山陸軍学校の学校案内を付す。

齋藤氏の文章は本書のための書き下ろしである。また芥川氏の文章は『讀賣新聞』、團氏の文章は『日本経済新聞』にかつて連載された記事からの一部転載である。

最後に、同声会報記事や芥川、團両氏の文章その他数々の資料について惜しみなくご協力、ご助言下さった乗杉恂氏、一カ月にわたる連載から部分使用をご快諾下さった團伊玖磨、芥川眞澄両氏、また本項のために何かとご教示賜った方々、とくに大石清、早川博二、保木龍一各氏、そして同声会事務局に深謝申し上げる。

東京音楽学校に在学中の頃の思い出

齋藤高順

東京音楽学校に入学したのは昭和十八年（一九四三年）の四月でした。なにしろ今から半世紀以上も前のことですので日時など正確な記憶はありませんが、特に印象深く心に残っていることを思い出すまま記載いたします。

当時も東京音楽学校以外数校の私立の音楽学校がありましたが現在と異なり、作曲科があるのは東京音楽学校だけでした。その年は芥川也寸志君、奥村一君、依田昌忠（現・光正）君と私の四人が合格しました。一年先輩には團伊玖磨さんや大中恩さんなど七人おられました。

男子の制服は男の背広に黒ネクタイ、制帽は黒のソフトでした。あこがれの制服で初登校する時は胸が躍りました。

当時は二十歳になると兵役の義務がありましたが、大学・専門学校生などは卒業まで徴兵猶予の制度があり勉学に専念できました。

作曲科四人のうち芥川・依田の両君は下總皖一先生に、奥村君と私は信時潔先生に専門の作曲のレッスンを受け、四人一緒の授業では橋本國彦先生や細川碧先生から管弦楽法その他の合併授業を受けました。ほかにはピアノが重要な副科で、芥川君、奥村君は永井進先生、依田君と私は水谷達夫先生のレッスンを一緒に受けました。

世界大戦も大詰に近づいた頃、学生などへの徴兵猶予が廃止となり、適齢者は休学や退学をして戦地に行くようになりました。同級生数人の出征が決まった時には、芥川君が作った「送る歌」の詩に、作曲科の四人が連作で作曲し、声楽科の女子四人に歌ってもらい、彼らに聴かせて激励しました。当時の楽譜など全くありませんが、私が作曲した部分の詩を少し覚えておりますので、次に記します。

「共に学びし友よ　征く行く　砲煙こもる戦場へ……」で、その部分を歌って下さったのは黒羽(現・田村)美津子さんでした。先輩たちはどんどん出征し、一年上の作曲科からも数人が戦死され、将来を期待された優秀な方々が亡くなられました。

当時の校長乗杉先生は「せっかく音楽の勉強をされた方々が音楽で国のために尽せないで戦死するのは、当人のためにはもちろん国のためにもならないので非常に残念!!」とのお考えから、牛込戸山町の戸山学校にあった陸軍軍楽隊の隊長山口常光氏にその旨を伝えました。「音楽学校に在学中の希望者を軍楽隊員にさせることはできないだろうか」と相談したところ、隊長も賛成され、陸軍大臣にも理解され、実現の運びとなったそうです。

乗杉校長はたいそう喜ばれ、校内の掲示板に「兵隊検査を受ける年齢に近い者で、一般の軍隊に入らず、陸軍軍楽隊に入隊希望の者がおればただちに申し出よ」という意味の文が記されていました。

さっそく数人の希望者が申し込み、私もその一人でしたが、入隊試験は一般の方々と一緒で、九州や北海道からも希望者が集まりました。百人以上いたと思います。身体検査が主体でしたが、簡単な音感のテストもありました。

後日合格者の通知があり、東京音楽学校からは十四名の入隊が決まりました。

昭和十九年（一九四四年）十月始め頃、戸山学校に十四人揃って出発し、電車から降りて改札口を出ると女生徒たち数十人が待っていていっせいに合唱を始めました。曲は信時先生が作曲された「海行かば」でした。十四人は足をとめて美しいハーモニーに聴き入りました。合唱が終ると彼女らはわれわれに近づいてきて別れを惜しみました。親指ほどの張子の虎とハンカチをくれた人もいました。あの時の感激は忘れられません。

軍楽隊員になるにはまず楽器が演奏できることが先決ですから、隊員になる前八カ月の生徒期間があり、卒業してやっと陸軍軍楽上等兵になれるのです。

軍楽生徒の正式な服装は肩章が赤一色で星も何も付いていないほとんど士官学校の制服と同じでした。一般の軍人さんたちは私どもを見て士官候補生だと思ったに違いありません。

ある日外出先の路上でたまたま見かけた軍人から、こちらより一瞬速く挙手の礼を受け、慌てて答礼をしたことがありました。

このことも忘れられない思い出です。

音楽学校でトランペットやクラリネットなどの管楽器を専攻した者はその楽器を持たされましたが、一般の合格者はもちろん私ども作曲科やピアノ、声楽などを専攻していて、全く管楽器や打楽器にさわったこともない者たちは、適当に合いそうな楽器をあてがわれました。先輩の團伊玖磨さんは小太鼓とその他の打楽器、同級の芥

川君はバリトンサキソフォーン、奥村君はオーボエ、私はアルトサキソフォーンと決まりましたが、いずれも未経験の楽器です。

生徒期間は以前は二年間だったのが、戦争が激しくなるに従って期間が縮まり、私どもの頃は八カ月になったとのことです。

私たちを待っていたのは大変なハードスケジュールでした。軍楽生徒のレッスンは日曜以外毎朝あり、しかもたくさんの宿題が出て翌朝までに仕上げなくてはなりません。食事時間以外はすべて予定が詰まっていて、軍事訓練や作業などを済ませた夕食後の就寝時間までが唯一の自由時間で、この間に宿題をしなければならず、がむしゃらに稽古を重ねました。

その甲斐あってわれわれ十四人も一般から志願して入った人たちも、八カ月後には先輩の隊員たちと一緒に合奏することができました。昭和二十年（一九四五年）三月十日の東京大空襲で陸軍戸山学校軍楽隊もすっかり焼けましたが、隊員や楽器は防空壕に入っていて無事でした。軍隊では寝台が隣りどうしの者を戦友といっていましたが、私の戦友の一人が、伝令の為外へ出たところ、米軍機の焼夷弾の直撃を受け出血多量で戦死してしまいました。地方から来たまじめな青年で悲しいことでした。私は遺体をアルコールをつけた脱脂綿で拭き清め、夜明けまで遺体のわきで不寝番を命ぜられました。

その後軍楽隊は、日本橋の高等女学校の一部に移りました。もと作曲科で勉強をしていた團さんや私たちは四人とも一人ずつピアノ付の個室を与えられ、作曲作業を命ぜられました。リムスキー＝コルサコフの管弦楽法など参考にしながら、吹奏楽の曲を書くと仲間の隊員がパート譜を書いて、すぐ大編成で音を出してくれるのです。移調の間違えなどするとすごい響きになります。しかしこれが後に大変な役に立とうとは、当時は思いも寄りませんでした。他の隊員たちは焼跡の整理などで大変な労働をして居る際中、四人はゆっくり曲想を練っていたりしました。写譜希望の隊員が多く嬉しい悲鳴を上げたこともありました。

八月十五日の終戦で軍楽隊は解散となり、また音楽学校に戻りました。乗杉校長先生のありがたいご配慮で軍楽隊での十カ月間は休学ではなく前の同級生といっしょに進級しておりました。その後戦場から無事復員された一年先輩の大石清さんや小田野正之さんたちは、軍隊生活の期間が休学となり、後輩の私たちと同級生になりましたので申し訳ないような気がします。

ふたたび奥村君と私は信時先生のレッスンを受けることができました。宿題の作品を先生はピアノを弾きながら指導してくださるのですが、興が乗ると唇からよだれが流れピアノの鍵盤がぬれます。直した譜面を生徒に弾かせるのですが、指が滑ってなかなかうまく弾けません。しかしながら先生が一音変えてくださっただけで見違えるような曲に生れ変ってしまうのには驚きました。

卒業後も新作を発表するような会には必ず来てくださり、お手紙でいろいろご指導くださいました。このご恩をお返しするには良い作品を作るほかはないと思っております。なかなか果せませんが。

在学中の思い出というより失敗談としては、奏楽堂で新作のピアノ曲を自作自演した時です。無事に弾き終えて拍手を浴びながら去る時、出入口のドアとピアノ倉庫のドアを間違えて入ってしまい、

コンサートが全部終了するまで出るに出られず参ってしまいました。今になれば笑い話ですが、またなつかしい思い出です。

昭和二十二年（一九四七年）に本科を卒業し研究科に進みました。今度は先生方もすっかり変り、作曲は池内友次郎先生と伊福部昭先生で池内先生からは高度な和声法や対位法を、伊福部先生からはオーケストレイションのほか、現代の作曲法等一般にわたって指導を受けました。指揮法とピアノは金子登先生のレッスンを受けましたが、学校を了えてからの仕事の指導までしてくださいました。

昭和二十四年（一九二九年）に研究科を修了し、記念の作品として弦楽三重奏曲を作曲しました。親しい後輩の好意で、これもなつかしい奏楽堂でみごとな初演をしてくれました。ヴァイオリンが島根育さん、ヴィオラが田中榮一君、チェロは堀内靜雄君でした。

なんとか記憶していることだけ書かせていただきました。

（平成十一年六月）

自伝抄　歌の旅

芥川也寸志

音楽学校に〝ビリ〟入学

私が上野の東京音楽学校に入学したのは、太平洋戦争が勃発（ぼっぱつ）してから一年あまりたった、昭和十八年の春のことでした。

東京音楽学校の男子の制服は、伝統的に黒い背広に黒いソフトときめられておりましたが、すでに最初の東京空襲が行われていたにもかかわらず、この伝統は守られていて、生まれてはじめて着た背広、はじめて結んだネクタイの感触などは、今でも折にふれて想い出します。

ただつまらなかったのは、女子生徒とは絶対に口をきいてはならぬと、学校から固く申し渡されたことです。〝おはよう〟も〝今日は〟も、見つかれば生徒課に呼び出されてたっぷり怒られましたし、生意気な女生徒とつい口喧嘩（げんか）をしてしまった男は、あわや退学処分寸前という有様でした。

五十人あまりの同級生の中で、女生徒は圧倒的多数を占めておりましたが、教室に入る時は、まず彼女たちが全員入って着席するのを見とどけなければなりませんでしたし、出る時も同様で、室の中に女っ気がなくなるまで、男どもは何となくモソモソと、時をかせがなくてはなりませんでした。

かくの如く、西欧の風習であるレディー・ファーストが全く厳格に守られていたのは、あの軍国主義、国粋主義の吹きすさぶ中にあって、わが音楽学校のみではなかったかと思われます。〔後略〕

古本屋街で楽譜漁り

〔前略〕さて、憧（あこが）れの音楽学校に入学したものの、すでに太平洋戦争が一年数か月前に始まっておりましたから、いろいろな不便を忍ばねばなりませんでした。私たち作曲を勉強しようとする者には何よりも必要な、近代や現代の新しい楽譜はかなり前から輸入されず、手に入れることが出来ませんでしたので、奥村一、斎藤高順、依田光正、それに私、この総勢四人の作曲科の同級生たちは、毎日のように水道橋の古本屋街を歩いて楽譜漁（あさ）りをしたものです。〔後略〕

号令もヴィブラートで

音楽学校にもなかなかきびしい軍事教練がありました。天長節（天皇誕生日）のような祝日が来ると、全校の男子生徒は戦闘帽に巻脚絆、軍服まがいの馬糞色の服を着て、肩には三八式歩兵銃といういでたちで、上野から隊伍を組んで宮城前を目指すのです。ほかの専門学校や大学の学生たちに比べると、音楽学校の生徒は体格においても、行進の歩調においても、面構えや凛々しさなどの点においても数段劣っていましたから、何となく気勢の上がらぬ隊列となりましたが、その中でただ一つだけ、どこの学校にも負けない素晴らしいものがありました。どういうはずみか、私は校旗を持って先頭を歩く旗手に選ばれましたので、その素晴らしさは、人一倍うれしかったのです。

それは旗手の更に前を行く、ラッパ手の一団でした。とにかくラッパを専攻している管楽器科の連中がいるのですから、他の大学のスカスカしたラッパの音とは桁違い、実に朗々として圧倒的な優位を誇ったものです。

普通軍隊ラッパというものは、自然倍音によるド・ミ・ソの音しか使わないのですが、わが音楽学校隊は技術的に難しい、シ・フラットの音までを使って、即興的な進軍ラッパを吹くのですから、とても他の学校には太刀打ちが出来ません。

野営演習などで兵舎に泊まることがあると、他の大学の連中がそっと来て、〝焼きいも都合すっからよ、すまねえが消灯ラッパ吹いてくんねえかよ〟などと頼みにくることもありました。

ただし、音楽学校なるが故の悲劇もありました。声楽科の生徒が隊長になると、号令をかける時にどうしても日頃の修練の結果が現れて、声がふるえてしまうのです。頭右！という号令が、必ずカシラ〜〜という風にヴィブラートがかかってしまうので、一同おかしさが我慢出来ず、どうしても口が半開きの状態になっているところへ、右！とくるので、配属将校殿の方へ一斉に歯を食いしばった半笑いのヘンな顔が向けられるので、そのたびにひどく怒られたものです。

私が入学した翌年には、女子生徒まで教練をやるようになりました。ズボンをはき、その上から巻脚絆、まったく男と同じいでたちでしたが、戦闘帽の下から長い髪がぶら下がっているのが異様で、時々妙に切迫したような色気を感じました。後年、中国を旅した時に、女性がみんな男性と同じ人民服を着ているのを見て、ちょっとそれと似た感じを味わったことがあります。

そうこうするうちにいよいよ徴兵検査の通知が来ました。国民皆兵ですから仕方がありません。ただこの時、私が一般のレベルよりも性の知識に著しく欠けていることを知りました。軍医中尉が検査の注意を延々とする間、何だか私には分からないことを盛んに口にするのです。そのたびに爆笑の渦が湧くのですが、私はだんだん悲しくなるばかりでした。

検査の結果は〈第一乙種合格〉でした。橋本国彦先生は作曲の名手であると同時に、軽妙な洒落の名手でもありました。作曲の授業の時に徴兵検査の結果を報告すると、〝ぼくはどうだったかなあ……今は丁種（亭主）だけど……〟。

しかし、すぐにそんなことを言っている余裕はなくなりました。

陸軍軍楽隊に〝入門〟

学校の正面玄関から入るとすぐ右手にある掲示板に、普段は見馴れない大きな貼り紙が出ていました。東京音楽学校に入学した翌年の春の出来事です。

私がそれを見つけた時には、すでにかなり大勢の人たちが掲示板の前に群らがっていて、何やらただならぬ気配さえ感じられるのです。私が前の男の肩越しにやっと読んだその貼り紙には、大略次のような意味のことが書いてありました。

昭和十九年〇月〇日　陸軍戸山学校軍楽隊の入隊試験が行われる。試験内容は身体検査と音楽適性検査。適齢者で入隊志願の本学生徒は申し出ること。志願手続き等、申し出た者に対しては学校が便宜を与える――校長。

これは只事ではありません。ことによると、一生の岐路になる問題かもしれません。たちまちのうちに、あっちにひと群れ、こっちにひと群れ、仲間同士のかたまりが出来て、ヒソヒソと相談が始まりました。作曲科の同級生四人のうち、徴兵検査を受けている適齢者は、現在日本国民音楽振興財団理事で作曲家の奥村一、警視庁音楽隊長で作曲家の斎藤高順、それに私でしたが、ヒソヒソ話ぐらいで到底結論が出せるような問題ではありません。結局のところ、学校当局の真意が一体奈辺にありや、担任の教官からでも聞き出そうということになりました。

〈君たちはいずれ徴兵されて戦場に連れて行かれることになろう。そうなれば、音楽の勉強を続けていくことが出来なくなるばかりか、戦死をも覚悟しなければなるまい。それ位なら、いっそ軍楽隊を志願して入隊してしまえば、たとえ赤紙が来ても平気であるし、多少とも音楽の勉強が続けられる。君たちは是非とも、軍楽隊を志願し給え……。〉

担任教官のお話は、大要こんなものだったと記憶しています。とにかく、私たちは軍楽隊に入ることを決心したのです。

今にして思えば、これは賢明な道の選択でした。私の所へは軍楽隊に入隊した直後に、甲府の師団から召集令状が来ましたし、軍楽隊では多少どころか、大いに管楽器に関する勉強が出来たからです。

山口常光陸軍軍楽隊長から乗杉嘉寿東京音楽学校長に集団入隊の話が持ち込まれ、これがすぐに実現したものであることを、終戦から二十年あまりたってから、〈私の昭和史〉というテレビ番組の中で、山口隊長御自身からうかがいました。今年の一月の末、とても寒い日に、私たちにとって命の恩人である隊長殿は、静かにこの世を去って行かれました。

私たちの入隊は、昭和十九年十月一日でした。国電新大久保の駅前で、学友たちが〈海ゆかば〉を歌って送ってくれました。同級の女子生徒たちは、みんなポロポロ涙を流していました。

音楽学校の生徒で入隊を許されたのは十四人、その中には同級の作曲科の二人のほか、一年上の團伊玖磨、声楽の石津憲一、ヴァイオリンの北爪規世、ピアノの梶原完、などの諸氏がおりました。もうそのころは全員モンペ姿の女子生徒たちが打ち振る日の丸の旗に送られて、私たちは栄えある陸軍軍楽隊の正門をくぐったのでした。

色っぽいサキソフォン

〔前略〕陸軍軍楽隊のシステムは、まず戸山学校の軍楽生徒となり、一定の教育期間を経て、隊員になるというものでした。本来の教育期間は二年だったそうですが、非常時で一年になり、私たちの時には戦時下でさらに六か月に短縮されておりました。

陸軍の生徒の服装は、桜のボタンに階級章は赤ベタ、ときまっておりました。星が一つもないのに、外出した折には星三つの上等兵よりも上なので、敬礼をしなくてもよいかわりに、卒業すると星三つの上等兵になるというところが、ちょっと矛盾しておりました。

入隊して間もなく、全員に楽器が割りあてられました。一人一人教官の前に呼び出され、経歴をきかれ、入隊以前に管楽器か打楽器をやったことのある者は、その経験が生かされ、私のように両方とも駄目（だめ）な者は、背丈、面構えなどをジロッとにらんで、どんどんきめていきます。同期は百二十人もおりましたが、その早いこと早いこと。

楽器というものには、ある程度それぞれの性格というものがあって、その性格と吹き手の性格とがあわないと、いくら練習しても上達しないものです。例えば、フルートは物事を常識的に冷静に判断し得る人、オーボエは繊細な神経の持ち主、クラリネットはユーモリスト、ファゴットはどことなくちょっととぼけた感じの人物、などというように――。

ところが一瞬のうちに、楽器と人間との相性とを見抜いていく教官殿の眼は実に確かで、後になってみればみるほど、長年の経験とはいえ大したものだと思っています。

私に割りあてられたのはサキソフォン。生まれて始めて手にした楽器ですが、何となく色っぽい音を出すので、悪い気持ちはしませんでした。

行進曲「陸軍」の選び方

陸軍では第一種兵器が銃と剣、第二種兵器が喇叭（らっぱ）、第三種兵器が軍楽器とされておりました。ですから、フルートもクラリネットも兵器であり、大元帥陛下から賜った神聖なものゆえ、わが命を捨てても守らねばならぬ、と固く言い渡されておりました。

私に割りあてられた楽器はテナー・サキソフォンで、渡された現物をよく見ると、それはアメリカのコーン社製で、当然のことながらこの楽器には、Made in U.S.A. と刻み込まれておりました。

一方、私物の検閲は非常に厳しく、英語で書かれたものは、本であろうと楽譜であろうと、隊内への持ち込みは固く禁じられていました。

軍楽隊に入って、考え難いと思ったことがずいぶんありましたが、この〈敵国製品〉を命にかえても大事にしなければならぬということも、大変考え難いことの一つでした。〔後略〕

首席で卒業、銀時計

〔前略〕私は昭和二十年の四月のある日、軍楽生徒の生活を首席で卒業し、山口常光隊長に連れられて、教育総監であった土肥原賢二中将のところへ、銀時計を貰（もら）いに行きました。土肥原中将は、後にA級戦犯として絞首刑で亡くなりましたが、その時のわずか数分の笑顔が、悲劇的な死ゆえにどうしても忘れられないのです。それは、温かさがこぼれ落ちているような優しい笑顔でした。

殴られ方も上手に

軍隊の経験者は誰でも同じでしょうが、私も軍楽隊に入ってから、どれだけビンタを喰らったか数えきれません。

軍隊というところは、連帯責任をもって生活を律しておりましたので、何百発かのビンタの大部分は、私とは全く関係のない出来事に対する懲罰でした。生徒期間は単に右翼（成績のよかった者はこう呼ばれました）だったのですが、上等兵になってからは最右翼でしたので、同期の百二十人の誰かが殴られるようなことをやらかすと、私は必ず自動的に殴られました。

一期上の上等兵たちは、教育という名のもとに、とにかくよく殴りました。ビンタとはいっても、靴のスリッパ（裏にはカネが打ってありました）で殴る上靴ビンタ、剣を吊る革製のベルトで殴る帯革ビンタのほか、いろいろなビンタがありましたが、私はありとあらゆるビンタを体験しました。

ところが不思議なもので、始めのうちは殴られる毎に口から血を吐いて、ろくに食事も出来なかったものが、日を追って殴られ方が上手になり、しまいには、どんなに殴られても痛みを感じなくなりました。

大抵、ビンタの前には〈股を開け！　歯を喰いしばれ！〉という決まり文句が発せられますが、これさえも、これから強制的に麻薬でも飲まされるような、そんな気分さえ湧いてくる始末でした。恐らく、殴る物が頬に触れる直前に、精神力で頬の筋肉が鋼のようになってしまうのだろうと思います。とにかく、私にとってビンタは、勿論厭なものではありましたが、何百回と殴られていく中に、少なくともこわいものではなくなりました。

褌駆足は、寝室単位で行われました。具合の悪いことをやって、それがばれたりすると、その寝室の者全員は、裸一つになって、別命のあるまで軍人勅諭を唱えながら、営庭を駆けていなくてはならないという、一寸ユーモラスな懲罰でした。

この褌は、よく災難のきっかけとなりました。衛生を宗とする軍隊のことですから、よく〈褌見せろッ〉という号令がかかりました。上官には無論絶対服従ですから、みんなモソモソと袴下（ズボン下）の内側をまさぐって褌をひっぱり出し、上等兵殿にひろげて見せるのです。もし汚れていたりすると、そいつの寝室の同僚たちはいい迷惑です。

他の寝室はもう消灯して、いい気持ちそうに寝息を立てているというのに、その寝室だけは寝る訳にはいかないのです。全員、昼間していた褌をぐるぐるとマスクの様に鼻と口のところに巻きつけ、ベッドの上に正坐していなければならないからです。

私は時々、軍隊芸者という言葉を上官から聞きました。軍楽隊員であることへの自嘲の言葉です。下士官の中には、毎朝ヤットウヤットウと真剣を振り廻し、多分、その人物にとっては生ぬるい軍楽隊の生活の憂さを晴らしているのがいたり、歩兵などの他の兵科に転科を申し出るのもいたりして、そんな下級下士官や兵たちにとって、部下に気合を入れるのは、精神衛生上、最低絶対必要条件だったのでしょう。

ゲタ、フロに焼夷弾利用

陸軍戸山学校の北隣には騎兵学校があり、東隣は陸軍第一病院、

南隣には軍医学校というように、この戸山町一帯は陸軍部落でしたが、昭和二十年四月十三日夜の大空襲は、一夜にしてこのあたりを一面の焼け野原にしてしまいました。

私は何度も頭から水をかぶりながら、火の中を走りました。火をくぐると真っ先にやられたのは、不思議なことに衣服ではなくて靴などの皮製品でした。翌日になると、もう靴はバラバラになってしまって、とても履けたものではありません。

私たちは仕方なく、方々から板きれを集めてきました。下駄を作ろうというのです。鼻緒には絶妙なものがあって、しかもいくらでも手に入るのです。これには少々説明が必要です——。

アメリカ空軍は、東京の空襲にもっぱら焼夷弾を用いました。B29から落とされるのは、三十六発の焼夷弾がまとめてある大きな爆弾状のケースで、これがある高度まで落ちると自動的に小爆発がおこってケースが開き、焼夷弾がバラバラになって落ちて来ます。焼夷弾は六角形の筒型をしており、上部には長い緑色の布がつけられています。これは風の抵抗で焼夷弾を垂直に落とすためのものですが、小爆発の際にこの布に火がつき、遠くからながめると点々とこの火が夜空を泳ぎ、不気味な美しさを現出します。

この緑色の布が純毛で実にいい物でしたが、少し焼けこげがあるのを我慢すれば、絶好な鼻緒となりました。ただしこの下駄は、歯がないので歩きにくいことおびただしく、おまけに歩くとペッチャペッチャと安っぽい音を立てました。

事のついでに焼夷弾の中味ですが、底部には信管と少量の火薬が入っており、その上部に、二つの透明な袋にゼラチン状の半固形体が（ゴムをガソリンで溶かしたものだと教えられました）入っていて、底部の火薬が爆発するとこれに火がつき、粉々になって飛び散る仕掛けですが、熱そのものはそんなに高くはなく、私たちは不発弾を集めて来ては、風呂の燃料として使いました。放っておいても適度にチョロチョロと燃え続け、下駄の鼻緒とともに、風呂の薪の代用品としても焼夷弾は絶好のものでした。

ただし、こんな呑気なことが言えるのは、兵舎がみんな焼けてしまったあとだからで、身近にあとからあとから焼夷弾が落ちて来るのは、一目散に迫って来る凄まじい音を聞くだけでも、身も心も縮み上がるほど恐ろしいものです。

私たちは住みなれた家を焼かれ、秋葉原駅の近く、神田川の流れに面して建てられた日本橋高等女学校の校舎に、移り住むことになりました。この時の引っ越しは、けだし前代未聞の珍風景でありました。

近所の八百屋さんから借用した大八車に積んであるのは、すべて半分焼けたような品物ばかり、何よりもいけないのは満足な靴を履いている者が少なく、例のペッチャペッチャという変な音が聞こえることでした。〔後略〕

終戦の報にただ茫然

軍楽隊が日本橋高等女学校の校舎に移って間もなく、團伊玖磨、奥村一、斎藤高順、それに私の四人は、作曲室という一室をあてがわれました。團さんは一級上でしたが、みんな音楽学校からの仲間たち、他の連中は連日肉体作業をしているのに、私たちは与えられた作曲をしていればよかったのです。○○連隊の歌、○○大隊の歌

というようなものから、吹奏楽の編曲などの仕事があり、それまでの実技の習得とともに、この作曲室での作業を通じて得た管楽器の知識が、後にどれ程役立ったか分かりません。〔中略〕

ソヴィエト参戦のニュースは、丁度昼食中に、血相を変えて食堂に飛び込んで来た当直下士官によって伝えられましたが、その瞬間からもう誰一人、箸を手にする者はいませんでした。〔中略〕

もうこのころになると、隊全体がまるで浮足立ったような感じになっていました。

意外に早く……という感じで、終戦がやって来ました。隊長は全員を講堂に集めました。生まれて始めて、天皇陛下の声を聞きました。

まわりでは声を上げて泣く人もたくさんいましたが、私は泣けませんでした。妙にうつろな気分で、ただ茫然としていました。気が動転していたのかもしれません、事態を冷静に判断することも、あしたがどうなるかを考えることも出来ず、ただ茫然としていました。

学校中を駆けまわる

終戦となり、軍楽隊の中に混乱が起きました。何しろ階級で言えば一番下、私たちより下の軍楽隊員はついに歴史上にも存在しなくなってしまったのですから、混乱の真相などは、そんな下下にはまるで分かりませんでした。〔中略〕

間もなく、正式に復員することになりましたが、要領のいい連中は、軍楽隊の楽器を適当に持参の上、家路につきました。東北の農家出身の大男は、チューバのラッパの中にクラリネットや、フルートや、ピッコロを詰め込み、隙間には米袋を入れ、その重たい楽器を背中にかついで帰って行きました。そのヨロヨロとした後ろ姿は、何かしらいろいろなことを暗示しているようで、軍楽隊最後の一瞬の光景として、妙に鮮明な記憶となっています。

とにかくこうして、私の十か月あまりの軍楽隊生活は終わったのです——。

陸軍戸山学校のあった所は、徳川時代からの尾張候の別邸で、広大な庭園には東海道の山や川が作られ、私たちの時代になっても箱根山があり、大井川があり、一番はずれにはかなりの広さの琵琶湖という、本物と同じ形をした沼がありました。つつじの群生している箱根山は、旧東京市の三角点があった所だけにかなり高く、ここへ登ると上野の森や寛永寺の屋根がよく見えました。

ああ、あの森へまた通いたい、箱根山に登るたびに、その想いで胸がしめつけられるようでした。戦争は終わり、軍楽隊の生活も終わり、その想いは今、現実のものとなりました。

上野の山は、学校も、すぐ裏手の上野桜木町の古い町並みも、再三の東京大空襲をくぐり抜けて焼け残りました。

あの日のことは忘れられません。〔中略〕

私は一人で学校中を駆けまわりました。まるで、校舎全体が私を歓迎してくれているような気がしたのです。

校舎に住みつき自活

〔前略〕お茶の水にある現在の芸大附属音楽高校の校舎は、当時、分教場と呼ばれていましたが、ずっと授業は行われていませんでした。住む所に困っていた生徒たちがここに眼をつけ、学校は許しま

せんでしたが、勝手に塀をのり越えて住んでいることを聞き、私もその仲間に入るべく、掛蒲団一枚、敷蒲団一枚をまるめて肩にかつぎ、家を出ました。

能楽教室のある畳敷きのいくつかの部屋はもうとっくに占領されていましたので、ピアノのレッスン室を選び、能楽堂の隅っこの畳を二枚ほど拝借してベッドとして、あとは小さな電熱器を一つ据え付け、グランドピアノのあるのがひどく贅沢なだけで、あとは真に殺風景な教室での生活が始まりました。

とにかくコンクリート造りの建物で、床は冷たいリノリウム張り、いくら若いとはいえ、冬の寒さは身にこたえました。

夜寝る時は、掛蒲団の上に、まず楽譜をひろげ、それから新聞紙をかけ、手ぬぐいやハンケチの類まで丁寧にひろげて、積み重ねたものがずり落ちないように、洋服を着たままずるずると少しずつ潜り込むのです。始めのうちは失敗の連続でしたが、日がたつにつれ、積み方、潜り方、ともに熟練していきました。

もちろん一番困ったのは食べ物でしたが、人の弱みにつけこんでいたずらをする悪友もおりました。美術学校で油絵を専攻していたTなどもその一人でしたが、ある日私を尋ねてきて〝身体が一番！たまにゃ栄養をとる！〟というようなことを言って、紙包みを残して帰りました。

包みを開けてみると、終戦以来見たこともない見事な赤い肉が、きちんと経木に入れてあり、その上の紙には墨できちんと、〈兎肉〉と書いてありました。

絶えて肉などは口に入れておりませんでしたので、早速ありあわせの菜っ葉と一緒に鍋に放り込み、醤油をかけて煮たところ、物凄いアブクが湧き上り、見る間にあふれ出していきます。かねてから兎は泡が出ると聞いていましたので、あわてて肉をつまみ出し、口に入れたら何と不味いこと……それでももったいないから全部きれいに食べてしまいました。

翌日、Tはまた私を尋ねて来ました。

〝あの肉食った？〟

〝うん、全部。凄いアブクで……〟

〝家は下町でドラ猫が多くてネ。あれ、太った赤いの……〟

進駐軍で食事の伴奏

学生の分際で、使える道具といえばオンボロヴァイオリン一挺、服装はヨレヨレの軍服に軍靴というのでは、家を出て自活しようと決心はしたものの、稼ぎ場所などある訳がありません。

それでも私は学校で同志を募り、小さいながらバンドを作りました。そして、つてを頼っては進駐軍のキャンプや、宿舎に一夜の職を求めました。私たちに出来ることは、彼らの食事の伴奏でした。

私たちは演奏の腕にかけては、かなりの自信がありましたが、その反対に全く自信のなかったのが、まるで音楽家らしからぬいでたちでした。とにかく、私は復員して来た時以来の兵隊服しか持っていなかったのですから、汚ない上にヨレヨレで、仕事をもらいに行っても、一瞥して断られることが多かったのは、無理もなかったのです。あんな恰好で食堂にいられたら、食欲など湧くはずがありません。

それでも時たま職にありつけたのは、やはり終戦直後で、あちら

さんも到底パリッとしていたとはいえぬ事情もあり、世の中全体が汚ない上にヨレヨレだったせいでしょう。

初めて自分で稼いだ金で買ったのは、母に食べさせようと思ったシューマイ三個でした。忘れもしない、有楽町のガード下、露天商人の景気のいい呼び声に誘われたのですが、当時のこととて、包み紙などはなく、新聞紙に直接くるんであったので、電車を降りるまでは確かに温もりを感じていたのに、家に着いてみると、持っていたのはヴァイオリンのケースと穴のあいた新聞紙だけで、肝腎のシューマイがありません。

もう夜も更けていましたが、私は蠟燭を頼りに駅から家までの路を探し、とうとう三個とも見つけました。そのシューマイを洗って食べた母は涙を流しましたが、多分、うれしかったのではなく、悲しくて仕方がなかったのでしょう。

作曲を勉強している者にとって、終戦までの何年もの間、海外の新しい音楽が全く日本に入らず、何の知識も得られなかったことは、大変大きな苦痛でした。それだけに、終戦によって、少しずつ日本に入り始めた新しい音楽や、音楽に関する情報に関しては、いきおい敏感にならざるを得ませんでした。

当時の私にとって、まるで神の恩寵のように思えたのは、進駐軍向けの放送の中に、週一回、近代や現代の音楽ばかりを扱う番組があったことです。わずか一時間足らずの番組だったと記憶しますが、ほとんどが新しく聞く作品であったり、初めて聞く演奏家であったりしたので、文字通りラジオにかじりつくようにして聞きました。

自分の歌を求めて、長い長い旅に出ることになった、一番はじめのきっかけが、幼児期に毎日聞いたストラヴィンスキーのレコードだとすれば、戦争のあと、再び長い旅へと私を駆り立てるきっかけとなったのが、この進駐軍向けの放送でした。

この放送で特に印象が強かったのは、演奏、作曲の両面での、ソヴィエト音楽界の圧倒的な充実ぶりでした。この時の強烈な印象が、後に、まだ国交のないソヴィエトに無理をおして行く決心をつけさせたのです。

上野駅構内で職探し

自活のために学友たちと作ったバンドも、仕事のとり方から金のもらい方に至るまで、若さと未経験の悲しさで、労多くして実入りは少なく、とてもこれでは駄目だと数か月で見切りをつけ、一人で職探しをすることにしました。

〝上野駅に行けば、多分、誰かが掴まえてくれる……〟そう誰かに教わりました。

上野駅構内の広場は、その日の職を求める人々で埋まっていました。あちらに二人、こちらに一人と、台の上にのって大声を張りあげているのが職域毎にいる元締めの親分で、どういう仕組みになっているのか分かりませんが、うまく仕事をもらうと、中間搾取のひどい学生バンドのギャラとは、比較にならないほどいい賃金がもらえたのです。

私は毎日、ヴァイオリンのケースを抱えて、上野駅の広場に通いました。そんな生活が続くうちに、ふとしたことから、同じように上野駅を根拠地とするグループが、私を拾い上げてくれました。外

地から引き上げて来たというヴァイオリン、サキソフォン、トランペット、ドラム、各一人、それに日本舞踊のお姐さんが二人。

みんなの特徴は、とにかくうす汚いこと。私は兵隊服一着の着っぱなし、みんな大体、ヨレヨレの軍服か作業衣風の恰好で、ボスのヴァイオリンだけが礼服用の縞ズボンをはいていてチャップリンのようでした。

腕前の方も、概ね風体に比例し、楽器も相当なもので、ドラムにはいくつも絆創膏が張りつけてありました。〔後略〕

3人の会、雪の旗あげ

ヴァイオリンの流し稼業のために、学校へは試験の時にしか行きませんでした。今の大学とは違って、期末の試験さえいい成績をとっていれば大丈夫でした。

私の今までの生涯を通じて、最も真剣な気持ちで勉強をしたのは、この終戦直後の一番苦しかった時期だろうと思います。列車の床でも、キャンプへ向かう米軍の雪上車の中でも、本をひろげて勉強していました。ですから試験では、いつもいい点をもらいました。

ヴァイオリン稼業から足を洗ったのは、音楽学校を卒業し、放送局からいわゆる劇伴を依頼されるようになり、書く方で少しは稼げる自信がつくようになってからです。

卒業の時書いた〈弦楽四重奏曲〉はすぐに放送されましたし、新人演奏会では〈ピアノ三重奏曲〉が一流の演奏家によって初演されましたが、この時期に作った曲は、みんなすぐ気に入らなくなって捨ててしまいました。

卒業の翌年書いた〈交響三章〉は、自分で東京フィルハーモニー交響楽団を指揮して初演し、その翌年書いた〈シンフォニー・オーケストラのための音楽〉は幸いにも團伊玖磨さんの〈交響曲イ調〉とともに、NHKのコンクールで特賞に選ばれ、戦後始めて来日した外国のオーケストラ、シンフォニー・オブ・ザ・エアによって演奏されたため、アメリカにも紹介され、ヤンキー好みの曲調も手伝って、その後数百回も演奏されました。ある人は私の出世作と言い、またある人は軽薄で胸糞が悪くなる、と言いました。

どちらかと言うと、私自身は物事をやや深刻に考え過ぎる欠点を持っているのに、私の音楽はその正反対で、重苦しい音をひっぱり回して深刻ぶるようなことは、およそ性に合わないのです。

それから三、四年がたちました。三人が京都で顔を合わせたのは、全くの偶然だったのです。音楽学校で一年先輩、軍楽隊も一緒だった團伊玖磨さん、学校では二年後輩の黛敏郎さん、それに私、当時は映画会社が各社とも、かなりの数の映画を京都撮影所で作っておりましたので、三人とも映画音楽の仕事で、京都に来合わせたのです。

加茂川沿い、木屋町五条の宿屋で、何となく話が始まりました。

〝三人で共同して作品発表会をやれば、プログラムも面白くなるし、第一、経費が三分の一で済む。三人で会でも作ろうか……〟

偶然顔を合わせ、何となく始まった話は、たちまち会の結成から、〈3人の会〉という名前をきめるところまでいきました。

第一回の演奏会は昭和二十九年一月、日比谷公会堂で東京交響楽団を使って、三人がそれぞれ自作を指揮しました。

私はなけなしの金をはたいて、その日のために燕尾服を新調しました。そのころ、洋服にしろ、ワイシャツにしろ、とにかく新しいものを始めて身につけた日には、どういう訳か必ず雨が降りましたが、新調の燕尾服を着た発表会の当日は、日比谷公会堂も埋まるのではないかと思うほどの、大雪となってしまいました。

（『讀賣新聞』「自伝抄」欄　昭和五十二年二月二十二日～三月十六日より）

私の履歴書

東京音楽学校

團　伊玖磨

音楽学校の入試は僕にとっては楽なものだった。充分勉強してあったし、大体、そんな時代に音楽学校を受験する者などはそうは居る訳が無かった。受ける人間は余程の決心をした者だけだった。

声楽、ピアノ、弦楽器、管楽器、作曲、その全てで四十人。作曲科は七人だった。この七人は例年に較べて特に多かった。例年は一人か二人が定員だったのである。この年作曲専門の学生を七人にも増やした理由は、作曲家の養成が重要事と考えた当時の乗杉嘉寿校長の考えと、後に聞いた事だが、いずれ戦線に出て死んで行く人数を考えて、ひどい話しだが、スペアも入れたのだと聞かされた。

成る程、七人の同輩のうち、戦死二人、病死二人、現在生き残っている同級の作曲科の卒業生は、東京芸大から国立音大に移って作曲を講じている島岡譲と、子供の音楽と合唱曲を専心作曲している大中恩と僕の三人だけである。校長の考えは当たっていたと言える。

上野での生活は厳しく、真剣そのものだった。作曲科は主任教授が当時作曲家として盛名を馳せていた橋本国彦、教授を下総皖一、細川碧、他に名誉教授のような形で信時潔先生も教鞭を執って居られた。戦争中よく歌われた「海ゆかば」の作曲者である。僕は受験前からの縁で下総教授を専任教官として和声学、対位法、そして実作を、橋本教授に近代和声学と管弦楽法を、細川教授に楽式論を学んだ。

下総教授は専任であったためもあってか、恐ろしい程の厳格な教育を僕に課し、今考えても気の遠くなる程の量の和声、対位法、実作の宿題を与えるのだった。それは殆んど不可能と言える程の量だった。しかし、口惜しいので、徹夜を続けては全部の解答を書いて持って行った。

作曲の授業は一人対一人の授業である。先生はその多量の解答の中で、一個所でも誤ちや書き違えがあれば、五線紙を破く事も稀では無かった。破いた上でその屑を二階の教室の窓から捨てて、拾って来いと言う事さえあった。一人対一人の授業なのに、二つ以上の誤りがあれば、僕を壁際に立たせ、十分も十五分も睨み付ける事もあった。

ところが、他の学生の話しを聞くと、下総先生は優しくて、怒る事も無いし、叱る事も無いと言うのである。それを聞いて、どうして先生が僕にばかり辛く当たるのか思い悩んだ。ずっと経って、卒業してから、或る時、下総先生に僕は訊ねた。

「先生は随分沢山の宿題を僕に出しましたね」

先生の答えは意外だった。

「全部解答を書いて来ると思って宿題を出した覚えは無いよ。馬鹿正直に全部書いて来たのは後にも先にも君だけだった。君は馬鹿正直すぎたんだ。褒められた事じゃ無い」

「ほかの学生には先生は優しかったんですってね」

「うん、君はね、口惜しがらせれば口惜しがらせる程勉強する奴だったんだ。僕はそれを見抜いていた。そして、本物を作ろうと思ったんだ」

僕はその時になって、先生の本当の有り難さを知った。〔中略〕

戦争中の音楽学校は、外界から押し寄せる時代の波と、注がれる無理解の視線に堪えねばならなかったために、教官も学生も同志的な結合で結ばれていた。日本唯一の官立の音楽専門の学校にも取り潰しの動きが伝わって来て、そうした動きを避けるために義捐音楽会を開き、その収入で戦闘機だか練習機だかを軍に献納したりせねばならなかった。

人間は不思議な性質を持っている。周囲から孤立して、やがては戦線に駆り出されて死ぬか、本土決戦で死ぬかという状況が迫って来れば、自暴自棄になるか虚無的になるかしそうなものなのに、戦争中の上野の森に集まっていた音楽の学生は、それどころか、専門の勉強だけが命だとばかりに自己の研鑽に熱中していた。一般学課を学ぶ学校と異って、始めから音楽という明確な専門の技を磨く、今で言えば始めから大学院のような学校だったから、一人一人の目的も、周囲からの実力の評価も明白だったし、軍事教練だの、軍需工場への勤労動員だのという阻害要因が増えれば増える程、時を惜しんで専門の勉強に熱中するのが当然でもあった。

家や下宿でピアノなどを弾こうものなら国賊呼ばわりをされる時代だったから、早朝から学校の教室のピアノを取り合って練習に熱中する学生の姿は、今考えるといじらしくもあった。楽器を弾いていたというので窓から鼠の死骸を投げ込まれたり、歌を歌っていたというので青年団に殴られた学生もいた。その理由は常に「戦争中に何事だ」「この非常時に」というのだった。こういう人間には戦争とか時勢だけが「絶対」だったのだろうが、僕達は別な「絶対」を持っていた。戦争は何年かかるにしても一時的なものであって、いずれは終る。然し、「音」は戦争が続こうが終ろうが鳴り続けるのだし、音楽は人間ある限り終らない。そして、「音楽」は世界語、国際語なのだ。だから勉強するのだ、僕はそう思っていた。

作曲は下総先生のしごきのお蔭で基礎の和声学、転調論、対位法が終り、ソナタ（奏鳴曲）や弦楽三重奏曲、四重奏曲等を書く実作に入っていた。入学前に、実作が出来るようになったら見てあげよう、と言われた山田耕筰先生を頼って、別に作品を書いては赤坂桧町のお宅に通って添削を受けた。山田先生に見て戴くのは歌曲だった。先生は当時同棲中だったソプラノの辻輝子さんにそれらの歌を歌わせ、御自身はピアノ伴奏を弾きながら、実に貴重な意見と、特に日本語の音楽化の論理を熱心に教えて下さった。山田先生との関係は、ずっと経って山田先生が亡くなられるまで続く事となる。〔中略〕

昭和十九年の春、突然乗杉校長に呼ばれた僕達数人は、習得した技術で国に報いるために陸軍軍楽隊に入隊するように言われた。前例の無い事だったが、僕達は賛成した。

陸軍軍楽隊

入隊した陸軍軍楽隊は、正式名称の陸軍戸山学校軍楽隊が示すように、教育総監部に隷属する陸軍戸山学校に組み入れられていた。戸山学校は三つの部に分かれ、全陸軍の体操教官の養成、喇叭手の養成、そして軍楽隊の養成、派遣、活動が任務であった。

音楽を学ぶ事は同じでも、入隊して驚いた事は、音楽学校での方法と軍楽隊の方法がまるきり異る事だった。音楽学校がなごやかでやや女性的だったのに較べて、軍楽隊の教育はすべてがてきぱきと現実的、合目的的だった。ここでは一切の遅滞は許されなかった。

軍楽隊は全国から十七歳以上の志願兵制度で隊員を募集していた。昭和十九年、日本陸軍最後の軍楽兵採用は、それまでの最大人数百二十名だった。その中に上野の音楽学校からの仲間十四名が含まれていた。

先ず驚いたのは受け持ち楽器の配分だった。厳重な身体検査の後、上半身裸で一列に並ばせられた前を、前歯を見せろ、と言いながら、ベテランの上官が数人で歩いて過ぎながら楽器を決めて行くのである。

「歯並びが良いな、フリュート！」

「身体がでかいな、バス・テューバ！」

「腕が長い、トロンボーン！」

僕の前に来た上官は言った。

「やせ過ぎだ。何かを吹けば肺病になる。小太鼓！」

そして、僕の隣りに並んでいた芥川也寸志に言った。

「お前の顔は長いな、よし、テノール・サクソフォーン！」

そうして決められた楽器を、厳格な教官の鞭の下で三ヶ月で習得してしまうのが、僕達に課せられた軍務だった。音楽学校でだったら四年かかる技術を三ヶ月で！　僕達は音楽学校から転出して行ったから例外だったけれども、全国から志願で集まった新入隊員の中には、音楽に全くの未経験者も多かった。未経験者には、読譜、記譜、楽典の習得も冗談事では無かった。

軍楽隊の一日は、掃除、点呼、朝飯の後、午前中は各楽器群ごとに分かれての各個訓練、午後は体操と学課、夜は十時まで自習と決まっていた。午前中の楽器訓練は激しく、軍楽隊は全天候型でなければならぬという訳で、雨が降ろうが風が吹こうが、訓練は戸山ヶ原の一部を成していた吹きさらしの校庭で行われるのだった。訓練期間は厳冬にまたがっていた。粉雪混じりに風の吹きまくる日は、小太鼓のバチを持った指も痺れて辛かったけれども、若さというものは何と素晴らしいものだろう、僕達百二十人は、入隊四ヶ月目には、既に各個の楽器を習得して、「軽騎兵」や「詩人と農夫」の序曲、陸軍のテーマ曲「分列行進曲」等の合奏訓練に既に入っていた。

これは音楽的に言うと殆ど不可能事、或いは奇蹟に近い。特訓というものの凄まじさを知る思いがするが、その時になって、入隊当初行われた楽器配分が如何に正しいものだったかを僕達は知った。百二十人に楽器を配分して、一人も不適当が原因した落伍者が居ないなどという事は、考えられない事だからである。自分で好きだ、これを勉強したいという理由で選んだ楽器が肉体的に不適当である例をうようよする程多く見るにつけ、軍楽隊での肉体という物理的

条件、生理的条件を踏まえた上での楽器の配分法が、どんなに爽やかで、モダンな方法だったかを僕達は知って舌を巻いた。決してあてずっぽうに受け持ち楽器を決めたのでは無かったのである。

僕の就いた打楽器の教官は佐藤正二郎曹長だった。この教官は厳正な上に音楽的に僕を惹き付けた立派な人物だった。斎藤秀夫門下で指揮を学んでいた教官だっただけに、毎朝の戸外での厳しい特訓の中で、僕は教官から打楽器奏法の全てに加えて、リズムそのものの真髄と、リズムの奥に輝く生命の輝きを伝授された。これは後に、指揮者としての基本となった。

佐藤先生は、戦後、東京フィルハーモニーの首席打楽器奏者を経て、広島交響楽団を設立、その指揮者となり、現在も広島で後進の指導に精力的な活動の最中である。

軍楽隊での特訓が進行していた頃、東京には米軍爆撃機による空襲が始まり、それがどんどんエスカレートして行った。たとえ一機の侵入でも〝第三種兵器〟である全楽器を地下壕に疎開し、防火の部署に走らねばならない。昭和二十年になってからは、特訓と空襲の競争のような毎日が続いた。そんな中でいよいよ軍楽隊の本領である街頭演奏行進も始まった。

二月二十四日の大雪の中の街頭行進、三月十日の下町の大空襲直後の火と煙の中の戦災者激励の行進等々を続けていたうちに、四月十三日の夜、東京上空に侵入したB29の大編隊による中野から早稲田にかけての大空襲によって、戸山ヶ原一帯も火の海と化し、陸軍戸山学校も、隣りの東部第四部隊、東部第一陸軍病院と共に全焼した。雨のように降る焼夷弾の中で、一緒に消火活動に走り廻っていた同輩と、陸軍病院の患者、看護婦に戦死者が出た。

戸山学校には桜の木が多く、その年、四月十三日は桜の満開のさ中だった。紅蓮の炎の中に爆風で花びらが舞い狂い、地吹雪のように渦を巻き、遂には満開の桜並木そのものが燃え上がった。その中を隣りの第四部隊の燃える厩舎から逃げた数百頭の軍馬が狂い廻る情景は悪魔の饗宴を思わせた。

軍楽隊は、やがて焼け跡にぽつんと残っていた浅草橋の日本橋女学校を接収して移転し、五月二十八日、僕達は訓練生時代を終えて上等兵に任命された。

ぼろぼろの姿で、焼け跡の運動場で行われた卒業式は印象的だった。百二十人中の首席はサクソフォーンの芥川也寸志だった。芥川は気味の悪い程「出来る男」だった。軍隊での成績は実科、学科だけではない。日常の起居動作から掃除、洗濯、清潔整頓等、言ってみれば寝ぞうまで見られて採点されるのである。そうした中で首席になる事は並大抵の事ではない。僕も一所懸命に励んだが、洗濯嫌いの上清潔整頓がてんで駄目、遂にはしらみを発生させたという事で減点されて三番までしかなれなかった。

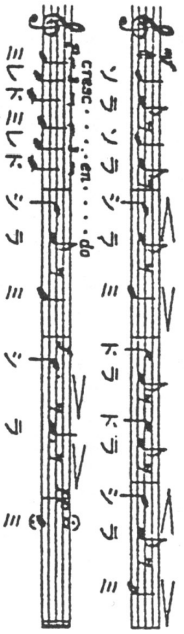
卒業で訓練期間は終ったので、あとは適材適所という訳で、もともと作曲専門だった僕と芥川は隊の演奏のための編曲に従う事となり、日本橋女学校の屋上に編曲室という一室をあてがわれて、一日中編曲を行うのだった。ブラス・バンドのための編曲は、楽器の種類が多いためもあって、オーケストラの編曲より遥かに手のかかるものである。僕達は命ぜられる侭に、一心不乱にこの仕事に従った。そうせねば間に合わなかったのである。しかし、この事は、僕

達を本当のプロに仕立て上げた。その上、書き上げた編曲はすぐに本隊が練習する音として聞けるのである。こんな良い作曲の勉強は無い。この事は、芥川と僕が戦後すぐに総譜を楽々と書ける作曲家として評価を受ける原因となった。

だんだんに仕事に熟達して、ひまも出来るようになった或る日、芥川と僕は、僕の袖口から這い出した二匹のしらみを机の上で競争させて遊んでいた。そして、どちらからともなく、ド・レ・ミ・ファを使ったシ・ラ・ミの歌を合作して合唱した。

ソ・ラ・ソ・ラ・シ・ラ・ミ！
ド・ラ・ド・ラ・シ・ラ・ミ！
ミ・レ・ド・ミ・レ・ド・シ・ラ・ミ！
シー・ラー・ミー！

この歌を僕達は気に入って、よく合唱した。芥川と僕の合作は他に一曲も無いが、この珍しい合作の歌は、珍にして妙、仲々の名曲（？）なのでご紹介する事にする。



敗　戦

〔前略〕二十年八月十五日。真夏の陽がぎりぎりと眩しかった正午、陸軍軍楽隊全隊員は、演奏の練習場に当てていた日本橋高女の講堂に整列して天皇の敗戦宣言のラジオ放送を聞いた。じっとその場の人物を観察した。職業軍人であった上官は失業を悟って色を失っていた。軍人精神で一杯の下士官は号泣していた。僕は音楽学校への復学に胸を躍らせていた。すぐ近くに立っていた芥川の眼を見てうなずいた。彼がゆっくりとうなずいた。言わないでも判っていた。作曲の勉強に戻るのだ。

箱根の仙石原に復員して、上野の学校に行ってみると、何はともあれ諸君は卒業だと言う。戦時下の文科系短縮教育制度が未だ生きているので、昭和十七年に入学した僕のクラスは十月一日に卒業、一年下の芥川達は、本来通りに再来年の三月に卒業だという。敗戦直後の何が何だか判らぬうちに、そういう訳で僕のクラスは卒業させられてしまった。〔後略〕

焼け跡の歌

〔前略〕昭和二十二年の春のこと、その頃住んでいた目黒の鷹番町の家と隣りの家の境いの柴木戸が開いて、隣家の野田さんというお嬢さんが訪ねて来た。ＮＨＫに勤めていて「婦人の時間」の係りをしているのですが、時々聞こえるピアノの音から作曲の勉強をしておられる事を知って、歌の作曲の依頼に来ました、やってごらんになりますか、と一篇の詩を示された。江間章子詩「花の街」とあった。喜んで作曲をした。そして、この歌は「婦人の時間」の歌として、二十三年の春、ＮＨＫの電波に乗って全国に送られて行った。未だ民放も無く、ＴＶも無論無い時代だった。

楽しく書いたこの歌は、恐らくその前奏の和音の動きがその頃としては新鮮だった事も手伝ってであろう、考えられないような大きな反響をもって迎えられた。僕はこの曲がきっかけとなってＮＨＫ

の専属作曲家となった。

どん底生活

〔前略〕或る日、家が無くて音楽学校のお茶の水の分教場の教室のグランド・ピアノの下で寝起きしていた芥川に用があって訪ねた時、彼は小さな電気焜炉の上にはんごうの半月型のふたを置いて、大豆を煮ていた。数えてみると大豆は十八粒あった。偶数で良かったね、とか言いながら、彼は煮えた大豆を九粒、その上に真赤に七味唐辛子を掛けて呉れた。こうすると辛くて辛くて食べる時間が延ばせるんだよ、と彼は言った。

九粒の夕食を辛さに涙してゆっくり食べながら、僕達は芥川の書き始めた管弦楽曲と、僕の書き始めた交響曲の話しをした。櫛風沐雨（しっぷうもくう）の生活の中で、どっこい生きながら、僕達の志はどこまでも高く、どこまでも強かった。若さ、そして良き友を持った幸福だった。〔後略〕

デヴュー

米軍占領下の日本は、言ってみれば猿ぐつわを嵌められていたようなものだった。民放もTVも無いこの時代、ラジオの影響力は大きかったので、NHKはGHQの監督下に置かれ、番組の細部にわたってまで監視されていた。米軍の指導——もしくは要求で作られた帯番組みも多く、そうした番組みに入るテーマ音楽、ブリッジ音楽、BG音楽を作るためにNHKでは作曲家の専属制度を始めた。昭和二十一、二年の事だったろうと思う。その制度は、殆ど食う事も出来ずに困窮している作曲家の救済も意図されていた。

昭和二十三年に専属になって仕事を始めた時、僕と芥川が最も若く、先輩には清瀬康二、箕作秋吉、服部正、飯田信夫等々以下、十三、四人の作曲家が居た。僕に割り当てられた番組みは「労働の時間」という、そんなに世の中ユートピアのように運べば文句はない、といった内容のGHQ指導の詰まらない番組みだった。専属の作曲家はこうした番組みを一本か二本持ち、必要があれば単発番組みの音楽やラジオ歌謡、子供のうた等も作るのだった。

当時のNHKは、日本（N）薄謝（H）協会（K）のニックネームがあった程、出演料、作曲料が安かったので、徹夜を続けて書きに書いても生活の資には事欠いた。或る日、NHK（当時は今の西新橋にあった）の出口で芥川にばったり出合った。焼け跡の新橋駅までの道ばたに闇屋が露店を広げて、一山三十円で鰯を五、六尾ずつ売っていた。何となく足を止めた僕たちは、二日か三日かけて、徹夜をして仕上げた僕達の作曲料が三十円、鰯の五、六尾の価値なんだなあと慨歎し合った。NHKが悪かったのでは無い。NHKは僕達を救って呉れたのである。ただ、インフレと戦後の荒廃で、何も彼もが滅茶苦茶だったのだから仕方が無い。僕達が貧乏を極めていたと言っても、日本中、真面目な人間は全員貧乏だったのである。

そんな中で、僕は生まれて初めての「交響曲」の作曲に従っていた。従来の西洋の交響曲の四つの楽章の全ての要素を一つの楽章に組み入れ、三管編成の大管弦楽の曲だった。徹夜又徹夜が続いていた。

昭和二十五年、NHK創立二十五周年を記念して、管弦楽曲募集

のコンクールが行われた。僕は出来たばかりの「交響曲イ調」をそのコンクールに提出した。親友芥川也寸志も亦「交響管弦楽のための音楽」という力作を提出した。いよいよ二人は勝敗を争う事になってしまったのである。どっちが特賞になっても困るねえ、と僕達は話し合った。

発表の日が来た。奇蹟が起こったのである。NHKに呼ばれた僕と芥川は、音楽部長の三宅善三から、「二人とも揃って特賞」を言い渡されたのである。審査員は、どちらを特賞にするかで迷いに迷い、論争果てし無く、遂に二人とも一位、特賞十万円を与える事に決まったというのである。こんな事はあとにもさきにも無い事だった。芥川と僕はその場で抱き合って喜び合った。このコンクールは賞金の大きさでも話題になった。NHKは薄謝協会では決して無かったのである。昭和二十五年の十万円は家が買える程の額だった。事実、この賞金で芥川は等々力に家を買い、お茶の水の分教場の教室のピアノの下から這い出すのである。

忘れる事の出来無い「交響曲イ調」と「交響管弦楽のための音楽」の初演——NHK創立二十五周年記念管弦楽曲募集コンクールの発表会は、日比谷公会堂で、放送記念日の三月二十一日の夜、近衛秀麿指揮によるNHK交響楽団によって行われた。芥川と僕は、並んで坐りながら、渦巻く互いの音の中で嬉し涙を流した。遂に僕達は本格的なデヴューを一緒に迎えたのである。

芥川の曲も、僕の曲も、その後しばしば演奏されているが、デヴュー曲らしい、今から聴けば「若い」作品である。このデヴューを契機として、僕は鎌倉の二階堂に移り、いよいよ本格的な作曲活動に入る事となる。

（作曲家）

（『日本経済新聞』「私の履歴書」欄　平成元年四月一日～三十日の内、八～十五日より）

次は『昭和十六年度音楽年鑑』（共益商社書店刊　昭和十六年三月）に掲載された陸軍戸山学校軍楽隊の案内である。各音楽学校などと並び、音楽関係の教育機関として掲載されている。

軍　樂　隊

陸軍軍樂隊

東京市牛込區戸山町
陸軍戸山學校
電話牛込四一九〇番

陸軍々樂隊の教育機關は、東京の陸軍戸山學校に在つて『陸軍戸山學校軍樂隊』と稱し、隊長は一等樂長又は二等樂長で、陸軍戸山學校長の指揮を受ける。戸山學校は體操、武術、軍樂及び喇叭を教へる學校で、軍樂隊は軍樂生徒と喇叭學生とを教へる關係上、こゝに置かれてゐるのである。

官等と昇進　軍樂隊員は現役軍人である。官等は軍樂大尉を最上とし、すべて軍樂上等兵から順次昇進して行くのである。

士官
- 軍樂大尉……（高等官六等）
- 軍樂中尉……（高等官七等）
- 軍樂少尉……（高等官八等）
- 軍樂准尉……（判任官一級）

下士官
- 軍樂曹長……（判任官二級）
- 軍樂軍曹……（判任官三級）
- 軍樂伍長……（判任官四級）

兵長

兵　軍樂上等兵

軍樂生徒の期間を終ると軍樂上等兵を命ぜられる。軍樂部下士官の現役期間は軍樂上等兵を命ぜられた年の十二月から起算して五年であるから、その期間内に軍樂隊をやめる事は出來ない。五年を經過したらば五年毎に再服役を志願するのである。准士官以上は現役定限年齢に滿つる迄は現役で居られる。總て伍長から順次昇進するのであるが、進級には實役停年と云ふものがあつて、伍長は半年、軍曹は一年、曹長は二年、准尉は三年、少尉は一年、中尉は二年、其の官に居てからでないと上へは進めない。實際は上等兵を命ぜられてから准尉に任ぜられる迄には十五年位かゝる。また軍人は現役定限年齢と云ふものがあつて、その年齢に到ると豫備役に編入される。現役定限年齢は、下士官四十五歳、准士官四十八歳、尉官五十歳、これは滿年で數へるのであるから、其の年齢に達する日まで現役に居られるのである。

給與　軍樂隊の人々は皆、外の自宅から通勤する。食料は勿論自辨である。軍樂上等兵の被服は貸與される。下士官は伍長になった時二着給與され、其後はずつと自辨であるが、被服補修費として年額金二十圓を給せられる。准士官以上は軍裝品一切が自辨であつて、准尉任官の時に支度料として金三百三十圓支給される。

棒給及び加俸（士官及准士官）

區分		棒給（年額）	加俸（月額）
軍樂大尉	一等	二、一五〇圓	年功加俸十圓
	二等	一、九〇〇圓	
	三等	一、七五〇圓	
軍樂中尉	一等	一、五〇〇圓	
	二等	一、三九〇圓	
軍樂少尉	一等	一、二四〇圓	
	二等	一、一三〇圓	
軍樂准尉	一等	九六〇圓	勤續加俸五圓
	二等	九〇〇圓	技術加俸六圓

給料及び加俸（下士官兵）月額

區分		給料	營外加俸	技術加俸
軍樂曹長	一等	三九圓〇〇	二八圓	
	二等	三四圓四〇	二九圓	
	三等	三〇圓〇〇	三〇圓	
軍樂軍曹	一等	二二圓四〇	三三圓	一等六圓
	二等	一八圓〇〇		二等五圓
	三等	一五圓〇〇		三等五圓
	四等	一三圓五〇	三五圓	四等三圓
	一等	一〇圓五〇		

軍樂伍長	二等	九圓〇〇	
軍樂上等兵		六圓四〇	三六圓

退職　下士官兵は五年間の現役を終ればいつでも退職できる。准士官以上になるとよほど止むを得ざる事由でないと退職できない。現役を十一年以上つとめてから豫備退役になると恩給がつく。その金額は階級と年限で違ふが大體やめた時の棒給の三分の一程度と思へばよい。

軍樂生徒　軍樂隊の人々は皆軍樂生徒として入隊し、陸軍戸山學校軍樂隊で二年間の教育を受け、それから隊付の軍樂上等兵を命ぜられ、順次昇進する規定である。いくら音樂の出來る人でも途中から割込むわけには行かず、茲には幹部候補生の制度もない。軍樂生徒は毎年若干名づゝ採用せられ十二月一日に入校する。入校の年齢は滿十六歳以上二十歳未滿で、年齢の計算は入校年の三月三十一日で行ふのであるから、數へ年で云へば、十七歳の早生れのものと、十八歳の遲生れのものが最低、二十一歳の早生れのものと二十二歳の遲生れのものとが最高である。

志願者は教育總監部、陸軍戸山學校又は聯隊區司令部（朝鮮では師團司令部、壹灣、關東州、滿洲では軍司令部）に四錢の切手を封入して申込むと志願用紙を送つてくれる。そこでその用紙に所要の記入をして戸籍謄本を添へ、身體檢査希望地の聯隊區司令官（朝鮮其他では師團長又は軍司令官）あてに差出すのである。期日は二月末日迄である。

志願票差出後に其の記載事項に異動を生じた時は、身體檢査前ならば志願票差出先の諸官に、檢査後ならば陸軍戸山學校長に屆出でなくてはならぬ。

身體檢査は一般の徵兵檢査の時に行はれる。身體檢査場までの旅費は自辨である。しかしそれ丈ではいけないので身體檢査合格後に學科試驗が必要である。學科試驗場は原則として各師團毎に設ける試驗の日時と試驗場の位置は八月末までに通知される。

學科試驗は陸軍戸山學校軍樂隊長と次席樂長とが分擔して全國の試驗場を巡回し、一々これを行ふので時期は九月頃である。試驗場までの旅費も自辨である。試驗は高等小學校程度で科目は、國語、作文、算術、地理、歷史、唱歌の六つである。（然し音樂についての特別な知識は不要）此の試驗に合格したと云ふ通知があると入校期を指定されるから（十二月）上京して陸軍戸山學校に入る。現住地から學校までの旅費は入校後支給して貰へる。

軍樂生徒たるの期間は二ケ年で、在學中は隊内に住居し、被服食料消耗品等一切を官給され、手當として月額四圓五十錢を支給されるから全く一錢も要らない。此の二ケ年間に習ふ科目は專門樂器のほかに、樂典、和聲學、及び一般軍人に必要な學問で、外國語としてはフランス語を習ふ。此の二ケ年が終ると卒業して軍樂上等兵を命ぜられる。

東京音楽学校の生徒が入隊した十九年度の陸軍戸山学校の資料は入手できなかったため、十八年度に関する資料を掲載しておく。

陸軍戸山學校　十八年度軍樂生徒を召募

陸軍戸山學校軍樂隊では昭和十八年十二月に採用すべき陸軍戸山學校軍樂生徒を召募することゝなり、十二月一日附陸軍省告示を以て公布された。

陸軍省告示　第四十三號

昭和十八年十二月採用スベキ陸軍戸山學校軍樂隊生徒ヲ左ノ各號ニ依リ召集ス

細部ニ付テハ陸軍諸學校生徒採用規則ニ依ル、但シ本告示中同規則ト異ナル事項ニ付テハ本告示ニ依ルモノトス

昭和十七年十二月一日

陸軍大臣　東條　英機

一、採用人員　約六十名

二、志願者年齢　大正十二年四月二日ヨリ昭和二年四月一日迄ニ出生ノ者

三、願書類ノ差出期日及差出先

告示ノ日ヨリ昭和十八年二月末日迄ニ到着スル如ク本人ノ希望スル身體檢査地、所管聯隊區司令官（朝鮮、壹灣、關東州、滿洲國又ハ支那ニ在リテハ陸軍兵事部長）

四、其ノ他、志願票用紙ハ本人ノ請求ニ依リ教育總監部、陸軍戸山學校又ハ聯隊區司令部（朝鮮臺灣、關東州、滿洲國又ハ支那ニ在リテハ陸軍兵事部長）ニ於テ之ヲ交附ス

（『音樂文化新聞』第三十四号　昭和十七年十二月十日）

三　戦後の収拾から新制大学へ

戦後の本校の情況を示す資料を日付順に掲載する。

（一）終戦直後の卒業式における学校長式辞（昭和二十年九月）
（二）文部省との往復文書
（三）昭和二十一年九月の教授会記録の一部
（四）文部省より女子生徒用夏服配給の文書（昭和二十一年九月）
（五）昭和二十二年一月の教授会議事録
（六）昭和二十二年二月の教授会議事録より学制改革案
（七）第五十八回卒業式（昭和二十二年三月）
（八）戦後の住宅事情による校内居住の資料
（九）第六十回卒業式（昭和二十四年二月）
（十）「母校だより」（『同聲會報』より）

戦後の学制改革については『音楽学部篇』においても扱う予定である。

（一）終戦直後の卒業式における学校長式辞（昭和二十年九月）

學校長式辭　案

本日茲ニ本校第五十七回卒業證書授與式ヲ擧行スルニ當リ、聊カ所懷ノ一端ヲ抒ベテ卒業生竝修了生諸子ニ告グ。

曩ニ昭和十六年十二月八日宣戰ノ詔勅ヲ拜シテヨリ既ニ四ヶ年ノ星霜ヲ苛烈ナル大東亞戰爭下ニ送迎シ、諸子ノ先輩ハ、或ハ學鶯トシテ躯ヲ、南海ノ蒼空ニ馳セ、或ハ豫科錬トシテ骨ヲ大陸ノ山野ニ暴ス。諸子モ亦忠實ナル勤勞學徒トシテ生産ニ晝夜ヲ棄テズ、擧校誠意赤心ヲ邦家ニ傾ケ捧ゲタルハ余ノ感謝ニ堪エザル所ナリ。